

ボランティアに関する報道にあたってのお願い

～ その表現、適切ですか？～

奉仕・慰問 編



■ 「表現」にこだわる意味 ～本パンフレットで目指すもの■

平素は、各地で活動するボランティアの活動を丹念に取材され、幅広い側面から活動の内容や課題などを報道いただき、ありがとうございます。

さて、今やその言葉を聞かない日はない、とも思えるほど多種多様な分野で活動する「ボランティア」。活動の内容や成果を報道いただくことでやりがいやパワーをいただける一方で、使われる言葉や表現によって、ボランティアの気持ちが萎えたり、ボランティア活動の価値が誤解されてしまう場合があります。

災害復興など、すでにボランティアの活動なくしては成り立たなくなっています。そのような社会のなかで、報道にあたって、一人ひとりの活動に至った思いや、関わるすべての人々が対等であるという当たり前のことを尊重する表現を取っていただきたいと思います。

特にこのパンフレットでは「奉仕」と「慰問」の表現について取り上げています。「奉仕」という表現ではボランティア活動の広がりを見せませんし、「慰問」という表現では対等な関係を崩しかねません。そこで、これらの問題をひきおこさないための提案をさせていただきました。

報道機関の皆さまには釈迦に説法といえることですが、**言の葉** — 魂を持った表現としての言葉は、ほんの小さな違いでも、時として本質を歪め、その価値を違えてしまうことがあります。そこで、まずボランティア活動に関する報道で、時折覚える違和感をお伝えします。また「ボランティア」という言葉に含まれる大きな価値と言える市民の自治や民主主義の土台を築く営みであることを解説します。

大勢の人々に情報を伝える報道機関の皆さまが、ボランティア活動に関する報道をする際に、このパンフレットが少しでもお役に立てば幸いです。

2025年4月

認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会
代表理事 栗木梨衣

目 次

「表現」にこだわる意味	2
「ボランティア」という言葉の意味	3
「奉仕」という表現では、「ボランティア」のもつ活動の広がりを見せません	4
「慰問」という表現では、上下関係を想起させるイメージが伴ってしまいます	6
JVCA についての紹介	7

「ボランティア」という言葉の意味

●言葉の由来

まず、言葉の本来の意味を説明します。「ボランティア」は、英語の volunteer に由来する外来語です。この英語は「自分から進んで～する」「喜んで～する」を意味するラテン語 volo（英語の will に対応する言葉で、ウォロと読みます）を語幹に、人を示す接尾辞「er」を加えて生まれた言葉です。

もっとも活動の発端は、「放っておけない!」という強い思いから始まる時もあれば、「自分を活かせる場を得たい」とか「一度、普段と違う世界をのぞいてみたい」という好奇心が起点の場合もあります。時には断りづらく渋々参加した活動の場で、その魅力に気づき、熱心に活動を始めたという方も大勢います。いずれにせよ、心の内側から湧いてくる意欲によって取り組まれる活動です。

●ボランティア活動の3要素

このボランティア活動を定義する要素は「やる気・世直し・手弁当」、つまり自発性（自主性）、社会性（公益性・公共性）、無償性の3点です。

- ・ **自発性（自主性）**：自発的とは「言われなくてもする」ことですが、同時に「言われても（自らが納得しなかったら）しない」ことでもあります。強制の対極にあるわけで、するかしないか、どのようなペースで、何のテーマに取り組むか、始めることも止めることも、自分自身で自由に決められる活動です。
- ・ **社会性（公益性・公共性）**：効果が開かれている公益活動です。ただし、行政とは異なり、自ら選んだ特定のテーマに特化して活動できます。その形態はさまざまで、政策提案などの運動を進める活動もあれば、スポーツや音楽などを広く楽しめるために取り組まれる価値創造型の活動もあります。
- ・ **無償性**：金銭的報酬を期待する活動は含めませんが、活動に伴う交通費や食費などを受けることは実費弁償と呼ばれ、無償の取り組みに含むのが一般的です。身銭を切って取り組まれるがゆえの発信力、対価との交換に還元されない営みとなることなど、無償であることゆえの強みもあります。

公益のために無償で取り組まれる活動であっても、戦時中、強制動員された「勤労奉仕」などは、ボランティア活動とは呼べません。こうした活動と対比するために、外来語が使われているとも言えます。

●自発性を大切にすることの意味

3要素の中で特に重要なのが「自発性」。この特性はボランティア活動の長所を生み出す源泉です。

- ・ **機動性を生み出す**：災害時などに注目されるボランティアの機動性は、自発的だから生まれます。ボランティアは自らの発意とフットワークで、容易に機動的な活動を進めることができます。
- ・ **「温かさ」を生み出す**：特定のテーマや対象を選べるわけですから“他ならぬあなた”のために心を込めて特別な関わりをすることもできます。だから、家族や友人と同様に、温かい関わりができます。
- ・ **多彩な活動を生み出す**：個々人の関心や能力を生かすことで、結果として多彩な活動が生み出されます。社会の多様なニーズに応えることで、多様性を認め合う社会を築くことにもつながります。
- ・ **新たな活動を創造する**：現状を改革し、未知の取り組みや開拓的な方法に果敢に挑戦することも容易です。結果に対する責任を自ら背負い、試行錯誤と創意工夫を重ね、新たな活動を創造していきます。
- ・ **自治の主体を育む**：お役所任せにして、問題意識が不満に転嫁し、クレームをぶつける。そんな「お客様化社会」化が進む中、社会の課題解決に直接関わることは、自治の主体となる体験でもあります。
- ・ **活動者自身が元気になる**：様々な人々と共感でつながり、自身も主体となって課題を解決し活動を創造していける体験によって自己有用感が高まり、ボランティア自身の健康寿命が延びたりします。

ボランティア活動が自発性を核とする活動であることに、私たちはこのような意味を見出しています。

「奉仕」の表現では、「ボランティア」のもつ活動の広がりを見せません

私たちは、こんな場面で「奉仕」という表現や、「ボランティア」の限定的な理解にモヤモヤしています

- ・取材時に「ボランティア活動」と説明し、新聞記事の本文でも「ボランティア活動」と紹介されているのに、見出し・タイトルでは、たとえば「100歳、奉仕（活動）に参加」と言い換えられる……などの事例が頻出しています。

私たちの提案

「ボランティア活動」を、活動者の理解なく、「奉仕（活動）」と言い換えることはやめましょう。本人の意志で自発的に取り組んだボランティア活動の意味や価値が、異なって伝わります。

また、ボランティア活動の中には、問題提起や政策提言を進める運動タイプの活動もあります。サービス提供型だけに限定せず、運動型も含む広いイメージで捉える報道をお願いしたいと思います。

■問題点は、ここにあります

「奉仕」という言葉は「^{たてまつ}奉^{つか}り仕える」わけですから、「国家や社会などの権威や、信仰の対象である神、あるいは目上の者などのために、自らの利益をかえりみず、力を尽くすこと」という意味があります。こうした行為は信仰の証として自発的に行う場合もあります。それに、奉仕という表現で、自らの活動を表現したいという方もいらっしゃるでしょう。団体名や活動の名称に奉仕という言葉が入っている例も少なくありません。そうした方々の取り組みを報道する際に「奉仕」という言葉が使われることは、まったく問題ないと考えます。しかし、奉仕という言葉に伴うイメージを嫌い、ボランティアという表現にこだわる方も、数多くいらっしゃいます。

そもそも、「奉仕」という言葉は、戦前・戦中に使われた「勤労奉仕」という表現が象徴するように、国家のために無償で労力を提供させるために、本人の意志にかかわらず、人々を強制的に動員する際にも多用されました。つまり「奉仕」という言葉は、公益や権威などへの貢献の意味が強調され、自発的であるかどうかを問わない言葉です。

一方、「ボランティア」という言葉の核には「自らすすんで」「主体的・自発的に取り組む」という意味があります。つまり強制される活動をボランティア活動とは呼びません。日本に古くから「奉仕」という言葉があったにもかかわらず、ボランティアという英語に由来する外来語の普及が図られたのは、この自発的・自治的な取り組みということの価値が重視されてきたからです。

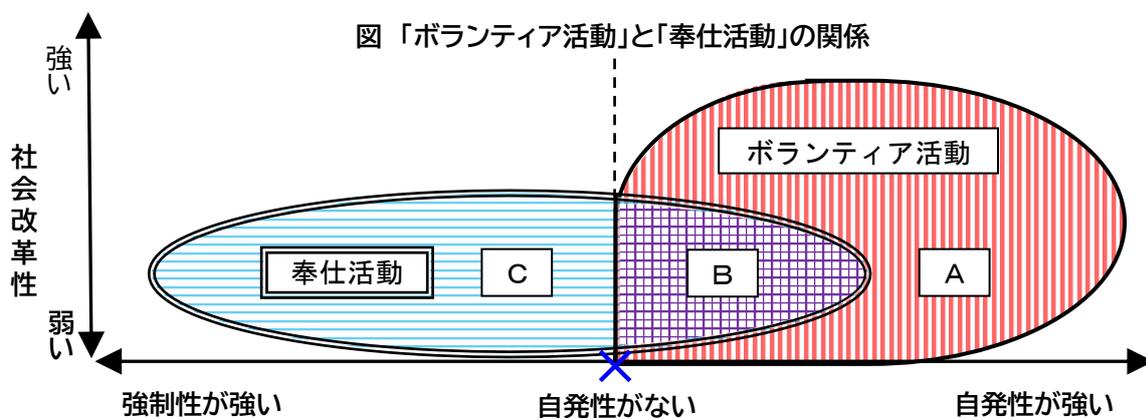
「ボランティア」を「奉仕」に置き換えると、ボランティアという言葉に込められた自発的な社会活動への参加の価値と、その活動の多様な広がりを狭めてしまいます。「したくて、している」自発的な行為である「ボランティア活動」を「奉仕」という言葉で報道されると、まるで自己犠牲的に身を捧げているかのような印象を抱かせ、ボランティアの姿勢が伝えられず、事実がまげられてしまうことにもなります。

■解説:「ボランティア」が意味すること

「ボランティア活動推進」が語られるとき、肝心の「自発性」や「主体性」が^{ないがし}蔑ろにされることがあります。たとえば「良いことだから、子ども達全員にやらせよう」という発想を持つ人もいます。しかし、ボランティア活動がもつ最大のチカラは自発、つまり「私」発であること。つまり、自分自身が気になること、好きなこと、得意なこと、あるいは憤りを感じることを、放っておけないと思うこと……からスタートすることに大きな意味があります。

また、あるテレビの報道番組で、海外での学生デモに関して「デモは民主主義のバロメーターだから私は支持します。日本ではボランティアの活動が高く評価されますが、デモはそれと同じぐらい高く評価されるべきことです」と発言し、デモとボランティア活動とは別物であると捉えるメッセージが放送されました。しかし、ボランティア活動の取り組みのなかには政策提言や批判・抗議活動などのアドボカシーや政治活動への参加もあります。加えて文化活動やスポーツの指導などのように、困難な状況下で苦しむ人々を応援するというよりも人々の生き生きとした暮らしや能力の向上を応援する価値創造型の取り組みもあります。さらにWikipediaへの書き込みのように知的に共有情報を構築する活動もボランティアの手で進められています。これらは奉仕活動の自己犠牲的なサービス・お手伝いのイメージを超えるものです。

もっとも「奉仕」という言葉の意味は広く、宗教活動の際に使われる場合のように、神や仏の教えに従い自主的・主体的に自己犠牲的な形でなされる献身を示す場合もあります。そこで、「ボランティア」と「奉仕」という言葉の示す概念の関係を整理したのが、下の図です。



【出典】日本ボランティアコーディネーター協会編『ボランティアコーディネーション力 第3版』中央法規出版 p16~17

「A」の部分は市民運動などの社会改革性が強い活動や、文化活動やスポーツ指導など楽しさを広げていく価値創造型で、自己犠牲的な感覚が弱い活動になります。一方、「C」の部分は強制を伴う活動であり、ボランティア活動ではありません。そして、自己犠牲的な活動ではあるものの担い手自身の価値観や倫理観に基づいて自主的・主体的に取り組み、ボランティア活動でもありつつ奉仕活動としての取り組みでもあるのが「B」の部分になり、ここはボランティア活動でもあり奉仕活動とも呼べるものとなります。

2001年に改正された学校教育法と社会教育法に「ボランティア活動など社会奉仕体験活動」という規定が盛り込まれ、まるでボランティア活動は奉仕活動の一部のような印象を与える表現となっています。しかし、この規定は「社会奉仕体験活動」の代表的な事例として図の「B」のボランティア活動を例示しているとも解釈することができ、この規定をもって「A」の活動スタイルを否定しているとはできません。

結局、字数の多い「ボランティア」という言葉を、安易に「奉仕」と言い換えることには、大きな問題があると言えます。

ボランティア活動は「参加」の楽しさを堪能できる営みであり、権威などに頼らず、市民が主体的・自治的に地域社会を築いていく取り組みでもあります。この市民自治の志向は、とても重要です。

義務や強制ではなく、自発的・主体的な取り組みであるからこそ、自らの感性を生かして多くの人が気づかないような小さな問題に気づくことがあり、自発的・主体的だからこそ、もっと工夫をしたい、もっとニーズに応えたいと思い、その結果、前例のない先駆的でユニークな取り組みを生み出すことにもつながります。「奉仕」という表現では示せない、このようなボランティア活動の魅力を伝える報道をしていただきたいと思います。

「慰問」という表現では、上下関係を想起させるイメージが伴ってしまいます

私たちは、こんな場面で「慰問」という表現にモヤモヤしています

ボランティアが福祉施設などで演奏活動などをしたり、被災地の避難所を訪問した際、「訪問」ではなく、「慰問」と報道され、慰めに行ったわけではない、私たち自身も共に楽しみ、喜びを共有したのに、と、とても残念な思いになります。

私たちの提案

「慰問」の言葉本来の意味を知り、「訪問」としませんか？

伝えたい内容は「訪問」で十分に伝わります。現代に合った対等な関係を示す表現となります。

■問題点は、ここにあります

「慰問」を辞書で引くと『不幸な境遇の人や、災害・病気で苦しんでいる人などを見舞うこと』とあります。つまり、「慰める」という言葉には、自らを基準に対象者を不幸せとみなし哀れむニュアンスがあります。

しかし、福祉施設や病院で生活する人や利用する人を不幸と決めつけていいのでしょうか。本人の希望や専門的ケアの必要度などによって、さまざまな選択があり得ます。

また、心身に障害があっても、そのことが即、不幸というわけではありません。社会の側（物理的環境や周囲の理解）の問題が解決することによって不自由さは改善されていきます。つまり、「障害」は本人にあるのではなく、社会にあると言えるのです。人は誰も病気になり、入院するときもあります。障害や病気で不自由なことはあるかもしれませんが、しかし不幸なことではありません。

何げなく使用される言葉の陰で、傷ついている人がいます。本人だけでなく、家族や施設の職員は、「慰問」と表現されたら、どんな気持ちになるでしょうか。

■解説:「訪問」とする意味

「慰問」という言葉は、戦時下に、出征兵士に物を送る「慰問袋」や有名な俳優や歌手が兵士を励ますために戦地に出向いた時に使用された言葉です。しかしながら戦後80年近く経過してなお、現代でも使用されています。「慰問」という言葉を使うことで、何か社会的に良いことをしているように表現されると思われているかもしれませんが、「慰問」という言葉には、“上から目線”の意味合いがあります。無意識にはありますが、上下関係を感じさせる場合もあるのです。芸能人が刑務所を訪問した場合も、「慰問」と表現すると、同様の問題を生み出しかねません。

ボランティア活動を進める際に、何か自分たちのできることで、社会に役立ちたいと思ったら、相手の都合や希望をきちんと聞き、相手の尊厳に配慮した活動とすることが大切です。そこで報道においても、応援する相手とのフラットな関係性を築くため、「慰問」の表現は避け、「訪問」など上下関係を想起させない表現を使用してください。

●「ボランティア報道アクションチーム」について●

本パンフレットの記事作成にあたっては、日本ボランティアコーディネーター協会の有志が集って「ボランティア報道アクションチーム」を組織し、事例検証、アンケート調査、報道機関関係者との意見交換、研究集会での分科会設定による意見交換などを経て、内容を検討してきました。

同チームで作成した素案は、全国のボランティアコーディネーションに関わるメンバーで構成する運営委員会での議論を経た後、理事会での審議を経て、成文化されました。

<チームメンバー>

- 石黒 建一（社会福祉士事務所 代表）
- 齋藤 元気（大学ボランティアセンター ボランティアコーディネーター）
- 清水 由子（生涯学習施設 ボランティアコーディネーター）
- 高橋 義博（市民活動センター スタッフ）
- 田口 雄一（NPO法人 副理事長）
- 竹脇 恵美（美術館 アドバイザー）
- 橋詰 勝代（社会福祉協議会 職員）
- 早瀬 昇（市民活動推進団体 理事長）
- 疋田 恵子（社会福祉協議会 職員）

日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)とは

日本ボランティアコーディネーター協会(英語名 Japan Volunteer Coordinators Association: 略称 JVCA)は、2001年1月に発足し、同年8月に特定非営利活動法人の認証を得た市民活動推進団体です。2014年には認定特定非営利活動法人として認定されました。

JVCAでは以下の5つを事業の柱としてさまざまな取り組みを行っています。

- ① ボランティア魅力と可能性を伝える
- ② ボランティアコーディネーションの機能を普及させる
- ③ ボランティアコーディネーターのネットワークの確立
- ④ ボランティアコーディネーターの専門性の向上
- ⑤ ボランティアコーディネーターの社会的認知の促進

コーディネート(coordinate)には“対等にする”“同格にする”という意味があります。

JVCAは「多様な人や組織が相互に対等な関係でつながり、新たな力を生み出せるように調整することで、一人ひとりが市民社会づくりに参加することを可能にする働き＝ボランティアコーディネーション力」の普及・向上に努めています。

書名 ボランティアに関する報道にあたってのお願い～ その表現、適切ですか？【奉仕・慰問編】

編集 JVCA ボランティア報道アクションチーム

発行日 2025年 4月1日

発行者 認定特定非営利活動法人 日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 2-13 末よしビル別館 30D

TEL:03-5225-1545 FAX:03-5225-1563

Email:jvca@jvca2001.org

Web:<https://jvca2001.org/>